

大佛次郎集

杉浦非水装幀

改
造
社
版

昭和五年十二月八日印刷
昭和五年十二月十日發行

現代日本文學全集 第六十篇

著者 大佛次郎

發行者 山本美

東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地

印刷者 杉山愛二

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二二

發兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目四〇番地

改造社

振替東京八四〇番
電話芝(43) 四三二二番

「大佛次郎集」目次

卷頭寫眞(照影)……………二
序 詞(筆蹟)……………二

ドレフユス事件

密書……………三

行 け、ユ ダー……………九

惡魔島……………一四

賣國奴エステラージー……………二〇

ゾラの審判……………二六

敗軍の悲劇……………三二

死線を守る……………三九

最後の切札……………四六

銀 簪……………五九

半 身……………六〇

赤穂浪士(上)

蔭を歩く男……………一〇七

花の子雨……………一二三

梯子の世段……………一二九

闇の必要……………一三四

意地と必要……………一三六

豫 祿 感……………一三九

元 祿 風……………一四二

步 合 一 屏……………一五一

乘 舟……………一五五

松 の 廊……………一六四

暗 閣……………一七一

主 従……………一七五

浮 草……………一八〇

千 部……………一八七

大 石 内 蔵……………一九七

女 郎 蜘蛛……………二〇五

畫 行……………二一三

水 上……………二二七

手 紙……………二三六

先 手……………二四六

龍 城……………二五四

灰 文……………二六二

嵐 文……………二七〇

萬 文……………二七九

城 の 時……………二八七

ま た……………二九六

つ 空……………三〇四

遠 鏡……………三〇一

赤穂浪士(中)

遠 鏡……………三〇一

赤穂浪士(下)

夕 顔……………三〇七

炎 天……………三二五

涼 亭……………三三三

二 人……………三三七

邪 夜……………三三九

月 夜……………三四五

秋 庭……………三五三

續 月 夜……………三五八

武 士……………三六六

分 裂……………三七五

惡 魔……………三七八

秋 風……………三九二

當 世……………四〇三

常 風……………四一三

年 譜……………四〇四

「赤穂浪士」後書……………四〇五

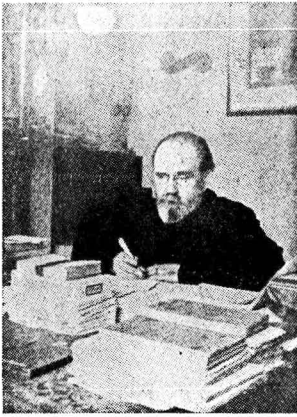
物を書くとことが段々苦しく
なつて来た。たゞ嫌うないう過去
を多岐なり拭ひ去らうと試みる
執つ情だけが僕を動かしつゝゆる。
その内とうにかはらうと思ふ小
さい夢だけが

大佛次郎

ドレフュス事件

密書

千八百九十四年の夏のことである。パリにある軍事情報局を中心にして佛蘭西陸軍の部内に尋常でなく昂奮した空気が感じられた。外部と嚴重に遮斷した密室の會議に。上官たちの部下に向ける背立つたやうな態度に。あわただしい人の出入りに。——參謀總長のドウ・ポアデツフル將軍は無論のこと、陸軍大臣のメルシエ將軍までがこの渦中に在つて、何事が焦慮しまた憂ひてゐる模様だつた。



(亡命當時のゾラ)

この衝動を起した原因になつてゐるのが、高官連がかはる／＼脱み見てゐる一通の手紙だつた。この手紙は、紙質はまき目の入つた極く薄いものであるが、ちぎつてあつて一葉の紙が上下に破れて三つになつてゐた。けれども、この三枚をつなぎ合せると、書いてある文面が残らず読み取れる。

それには、かう書いてあつた。
「その後御面會の御希望に接せざるも、小生は下記の興味深き情報をお知らせ致すべく候。

- 一、第百二十砲の制動機及びその用法に關する文書、
- 二、開戦と同時に戦線に送らるゝ軍に關する文書、(新作戦計畫に依りて變更せらるべきもの)
- 三、變更せられたる砲兵の組織に關する文書、
- 四、マダガスカル島討伐に關する文書、

五、野戰砲兵の射撃教程案、(千八百九十四年三月十四日の分)

最後の書類は最も得難きものにして、小生には數目に入手の見込み有之候。右は陸軍省に於て一定數を各部隊に配布し、その後の責任は各部隊に於て嚴重に負擔し、携帶將校は演習後に漏れなく返却致すことに相成居り候。

御希望の分はお渡申すべく候。右は後に小生に御返却相成度候。右は小生に於て嚴密に隱寫御送付申上ぐることを御承諾なき場合に左様仕るべく候。」
これは、あきらかに佛蘭西陸軍の機密を賣らうとしてゐるのだつた。それも、この手紙はパリにある獨逸大使館から盗み出されて來たものだから容易ならぬことである。

普佛戰役はつい昨日のことであつた。二十四年の歲月が經つてゐても、戰に敗北して首府の巴里を敵に蹂躪され、屈辱的な降服をした佛人は、獨逸人を憎惡する新しい、民族的な傳統をこの間に作り上げてゐた。佛蘭西の空には、「復讐」アルサス・ローレンの回復」と、二つの合言葉が赤く書かれてゐた。マルセイユーズ

の歌がこんなにも佛蘭西人の血を湧かしたことも大革命の時以來のことだつた。獨逸軍が侵入して来たことなど知りやうもない小学校の生徒までが、教壇で叫ぶ先生たちの熱狂に感染して、呪はれた前代達の遺産を自分たちのものにした。ポツシュ！ 獨逸人と呼ばれるのが、その頃佛蘭西人が何よりも我慢出来ない悪口になつてゐたのである。

軍事情報局と連絡して、ひそかに獨逸大使館に入つてゐたブルツケルと云ふスパイが、新しく伯林から赴任して来た武官のシユワルツコツベン大佐の手文庫の中から、この破れた密書を盗み出して来たのである。——ポツシュのシユワルツコツベン大佐に買はれてゐる佛蘭西人があると云ふことなのだ。

更に手紙の内容から云へば、この佛蘭西人が、名譽ある佛蘭西の軍籍に在る者だと云ふことだ。

ブルツケルと云ふスパイは當時佛蘭西の參謀本部が獨逸大使館へ入れて置いたバスマチアン夫人と云ふ女のスパイと、本情報報局との連絡役をして大使館の門衛を勤めてゐるアルサス人だつた。普佛戦争の時に、獨逸の「スパイの父親」と云はれるウイルヘルム・スチーベルは、四

萬人の部下をプロシヤ軍隊の侵入計畫地へ入れて間もなく起る戦争の土臺工事をしたと云ふくらゐで、これに懲りた佛蘭西參謀本部では、この頃さかんにスパイを使つて獨逸側の秘密を捜つてゐたのである。

參謀總長は内閣の命令で極秘裡に犯人を捜索させた。この手紙は封筒がないので郵送したものでどうかと判じ難い。捜索は、筆蹟の審査に依るよりほかはなかつた。これには暫く何の得るところもなかつた。その内に參謀本部の第四局の次長をしてゐる、ダボウイル中佐が休暇から戻つて来て、手紙の内容が全般的に各課の事務にわたつてゐる點から、他の部隊から科外勤務で參謀本部附となつてゐる人間に違ひないし、五項目の内三項が砲兵のことなので或ひはその人間が砲兵士官ではないか、と意見を述べた。これが人々の賛同を得た。

捜索の範圍は急に狭められた。——參謀本部附となつてゐる砲兵士官の名簿の中で、人々の目にとまつたのは、アルフレッド・ドレフユスと云ふ、アルサス生れの猶太系の砲兵大尉だつた。猶太人なのである。

動いて来た立會の將校たちの頭は、こゝで停つて動かなくなつた。この基督を裏切つたユダ

の子孫に對して、歐羅巴人全體がいはれなく感じて来た傳統的な憎惡と、常人と差別して考へるやうに住込まれて来た民族的な輕蔑が、聰明であるべき參謀將校たちの判斷を濁らせたのだつた。

誰れの發言に依つたものか、ドレフユス大尉の書いた書類を取寄せて問題の密書と筆蹟と比べて見ることになつた。その結果が、判然と、二つの筆蹟は同一だつた。——すくなくとも、審査に立會つた佛蘭西參謀本部の幹部級の將校たちは、さう見ることに於て一致した。

アルフレッド・ドレフユス。

かうして、この平凡な一砲兵大尉の名が、後の疑獄から歐羅巴全土に傳はることになつた。

猶太人が過去を一貫してどんな待遇を受けて来たかと云ふことは、事柄があまり不條理で根據のないために、海を隔ててゐる我々には殆んど理解出来ないくらゐである。私の面談のある舊帝政露西亞の外交官だつた男は、話の中にレニヤトロツキーの名が出た時に、「彼等はジュユダ。」と云ふ一語で、きたないものを避けるやうにその話を避けて終つたことがある。新しい文學ブルーストの讀者でありヴァレリの

詩の愛好者で、五箇國の言葉を自由に話して、羨のほい點でも珍らしいくらゐの男であつて、よし彼の現在の個人的不幸の原因となつた人々が話題にのほつてゐた場合であらうとも、この一語で萬事を云ひ盡したやうに思つてゐる彼の單純さが、私には寧ろ不思議だつた。

「なぜ、猶太人であることが悪い？」

と、私は極く自然に反問してから、この質問がひどく相手を考えないものでつたと気がついた。またその古い歐羅巴人は、それこそ不思議だと云ふやうに私の顔を見詰め、苦い顔をして黙り込んだのである。猶太人への蔑視は、歐羅巴人が十數世紀を批評の外に置いて來た心のくら闇の部分なのである。宗教的な信仰と一緒に、闇のまゝ祖先から傳へられて來て疑はずに、猶太人をけがらはしいもの、きたないもの、人道外のものとして來たのである。

佛蘭西の大革命は、この禁斷の區域に手をつけて清算しようと試みた。輝いた千七百八十九年が、この部落の人々に人権を回復した。けれども、ロベスピエール、ルツソオ、デイデオオ、ヴォルテールを生んだこの國は、同時にリシユリユーやエドワール・ドリュモンの母胎であつた。大衆は、絶望的なまでに動かない

波なのだ。ロベスピエールが宗教を亡ぼさうとした努力も、「理性」を偶像化して、女神に仕立てた花車に載せて革命の都に引き出す悲しい祭をして見せなければならなかつた佛蘭西である。人権を得た猶太人を、またもとの部落へ追込まうとする運動が眞面目に國民の間で計畫されてゐたのである。

普佛戦争の後、猶太人の佛蘭西に住む者が際立つて多くなつてゐた。勤勉な彼等の社會的の進出が際立つて目立つてゐた。政治的には、彼等は革命に依つて人権を賦與されただけに、この權利を奪ふ危険のある専制主義の復活を悦ばず、進歩的な自由主義の立場を探つてゐた。ブーランジェ將軍を中心とする王黨の陰謀に極力反對して共和國を守つたのも、その故であつた。それと同時に、帝王ナポレオンの夢をなほ残してゐる軍人と、王政時代の勢力を挽回しようとするカトリックの僧侶を中心とした反動勢力から見れば、猶太人に共通した進歩的な立場は、歴史の因襲をはなれて考へても憎悪すべきものであつた。この傾向を一段と強めたのは、「金のある猶太人」が實業界に勢力を

着々と占めて來たことである。殊にカトリック教徒の預金を集めるのが目的で法皇レオ十三

世が祝福を與へて設立したユニオン・ジェネラル銀行が破産した際に、放漫な貸出が眞實の原因であつたが、預金を失つたカトリック教徒は容易にこの破産が猶太系の實業家の陰謀に依つたものと信じさせられたのであつた。この事件があつてから財界の破綻が起る毎に、ユダの子孫の陰謀が必ず傳へられることになつた。その時分には、相當の企業に猶太系の實業家の参加してゐないことは稀れだつたから、事件の起る度に猶太人の名を探すのも容易だつたのである。共和國に於ける貴族の軍人と僧侶は、この

新しい敵を見付け出したと同時に、國民をこの敵から放して味方に付ける有力の材料を發見したわけであつた。猶太人の排斥は僧侶と軍人の國粹主義の運動に有利な標語となつた。反猶太同盟が、大通りに看板を掲げて人を集めてゐた。機關新聞が「自由公論」と云ふ、結果は逆説的な標題を掲げて發刊されてゐて、當時の佛蘭西人はすこしも不思議としてゐなかつたし、これが巧みな計謀の下に國粹主義の運動と結びついてから、國民殊に軍人の間に勢力をひろげてゐたのである。

審査の結果はすぐに上官に報告せられた。

參謀總長ポアデツフル將軍から陸軍大臣メルシエ將軍に。

陸相は閣議へも報告した。

更に問題の密書を筆蹟鑑定専門家を呼んでその意見を求めた。巴里銀行の署名鑑定家ゴペールは、ドレフユスの筆蹟とくらべて、これは同じ人間が書いたものでないと言言したが、警務局雇の鑑定人ベルチヨンは、わざと書體を變へて書いてあるが同一人間の筆蹟に相違ないと斷定した。その時はもう部内の意見はドレフユスを逮捕することに決つてゐたので、メルシエ陸相は躊躇なく逮捕命令を出した。この逮捕にはデュ・パチイ・ドゥ・克蘭少佐の意見で、少佐自身が當ることになつた。

ドレフユス大尉は十月十三日の土曜日に、次の月曜日の午前九時に檢閲を行ふから陸軍省に出頭しろと云ふ命令を受取つた。服装を平服着用と指定してあつた。普通夜ある檢閲を朝やると云ふのが變つてゐるし、平服着用と云ふのは異例で、大尉にも不審に思はれないこともなかつたが、さう感じただけで別段深く考へもしなかつた。

このアルフレッド・ドレフユスは、アルサス州のミュールズの生れで、四人兄弟の一番末だつ

たが、アルサスが獨逸に割讓せられ、獨佛いづれの國籍を採るかば住民が自由に選擇することになつたので、一番上の兄が家を繼いで故郷に残り、アルフレッドは二人の兄とともに好んで佛蘭西の國籍に残つて、そのため巴里へ移住して來たのである。故郷の土地が敵に奪はれ佛蘭西人である限り再び住むことが出来なくなつたと云ふのが、青年の心を強く動かさずにはゐなかつた。アルフレッド・ドレフユスは軍人を志願したし、目的を達したからも熱心な復讐職の主張者になつた。軍人を自分の天職だと考へて誇りにしてゐたやうだし、ナポレオンがこの青年士官の夢だつたやうである。勉強家で、

數學が好きで眞面目一方の氣性だからあまり同僚の受けはよくなかつたが、勤務の方は實直で評判がよく家庭も幸福だつた。妻はリユシイと云つてダイヤモンド商人の娘で、實家が富裕なのでドレフユスの家も並の生活よりは暮し向が樂だつた。夫婦の中には、もう二人の子供が儲けられてゐたのである。

この命令を受けた次の日には、いつも日曜の晩は妻の實家へ夕食に行く習慣だつたので、そこへ行つて、夜迎へ戻つて來た。次の朝もいつものやうに、三つと六ヶ月になる子供に門口

まで送られて、これもいつものやうに優しく子供を抱いてやつてから、徒歩で陸軍省へ向つた。すこし時間が早すぎたので、玄關の前にある庭を散歩してから、内へ入つた。霧のあるつめた朝だつた。ピカールと云ふ少佐が立つてゐた。

『こちらへ來たまへ。』

と云つて、自分の事務室に通して、用もない話を持ちかけた。

ドレフユスは初めて、呼ばれたのが自分だけらしいのが氣がついた。

ピカール少佐は、暫くしてから、參謀總長の部屋へドレフユスを連れて行つた。そこには總長はゐないで、デュ・パチイ・ドゥ・克蘭少佐がドレフユスの知らない平服の三人の男とゐて、大尉の敬禮を受けた。その三人と云ふのは、あとで判つたが、憲兵總監とその書記と記録係だつた。

『將軍は今來られるが……』

と話しかけたデュ・パチイ少佐の聲は、ドレフユスにも、何かしら普通でない調子が感ぜられるものだつた。

『それまで、私は手紙を書きたいが、手を痛めてゐるので、君に筆記して貰はう。』

みれば脇の卓にペン軸と紙の用意が出来てゐた。ドレフユスが何気なくそれに向つて坐ると、少佐は椅子を持つて来て、ドレフユスの傍に懸掛けた。

少佐が口述してドレフユスに書かせたのは、例の密書の文句だつた。一々言葉を區切つて口述しながら少佐の目は、ペンを持つたドレフユスの手に凝とそまがれてゐた。

「君、手がふるへてをるぢやないか？」

少佐が急、詰問するやうにから云ひ出したので、そんな筈のなかつたドレフユスは吃驚したやうに振向いた。

少佐は凄い氣色で繰返した。

「ふるへてゐる……」



(ドレフユス)

何となく敵意に近いものが感じられるやうな聲である。ドレフユスは自分の手を見詰めた。ふるへてゐるやうには信じられなかつたが、冷たい外氣の中を歩いて来たところだつたので、おとなしく

「手がつめたのであります。」

と答へた。

次にドレフユスが驚いたのは、少佐が、「重大なところだ」と叱りつけるやうに云つた時だつた。これも意味がわからなかつたので、ドレフユスは、たゞ字體を正しく書くやうにした。

「それまで。」

と少佐は急に口述を歇めて、椅子から立つた。

立つたかと思ふと、その手を重くドレフユスの肩へ置いて

「法律の名に於て、君を逮捕する。」

と云ひ

「叛逆罪だ。」

と附加へた。

ドレフユスは立ち上つてゐた。

何が何だかわからずに聲を立てて抗議した。

その時までに傍に來てゐた憲兵總監と書記が

それと見ると、左右からドレフユスの腕をつか

んだ。

叛逆罪？ ドレフユスは急に自分の立たされた位置を自覺した。蒼ざめたのが自分でもわかつた。

鍵をそつくりお渡しします。家をあらためて下さい。私は潔白です。」

と叫んだ。

「證據は何ですか？ このやうなげがらしい罪を私が犯したとなさる、證據は何でありますか。」

とも云つた。

しかし、そこへアンリ少佐が憲兵を連れて現れて來てゐた。ドレフユスは、シエルシユ・ミ

ダイの監獄へ護送されて獨房へ收容せられた。

鍵は憲兵が持ち去つた。

ドレフユスは、自分が侮辱された瞬間のことを思ひ出してから狂人のやうになつた。

憲兵たちは、ドレフユスが我れと我頭を壁に打ちあて始めたのを見て、狼狽して驅けて來て、それからずつと監視に付いた。

陸軍部内では、陸相のメルシエ將軍からして、ドレフユスの有罪を確信してゐた。わけてもデュ・パチイ少佐は自分から審問を買つて出たくらゐで、その後、熱心に事務を進めた。

ドレフヌスの下獄と同時に居室の自宅搜索が行はれた。それにはデュ・パチイ少佐も立會つたが、失神もしさうに驚愕してゐるドレフヌスの妻には、何も搜索の理由を打明けなかつた。このことは全般的にまだ極秘にされてゐたのである。軍部の意見では、もつと明確な證據を上げてから發表する手筈だつた。その意味で、ドレフヌスの逮捕もまた假處分と解釋してよいわけであつた。

デュ・パチイ少佐が監視の下にドレフヌスに筆記させた文字が、例の密書と並べて、再び鑑定に廻された。前に同一人の筆跡だと鑑定したベルチヨンは同じ證言を繰返した。これに追隨する者もあつたが、さうでないといふ者もあつた。この手段が、證據として十分の役をしさうにも見えなかつた。

デュ・パチイ少佐は、方向を變へて、ドレフヌスに自白させようといふ決心して、毎日のやうに獄中で訊問を續けた。例の密書も突付けられた。その結果もドレフヌスは

『私の知らないことです。』と冷静に繰返すばかりであつた。

デュ・パチイ少佐は、考へられるだけの方法を試みて見た。ドレフヌスは、立つたまゝ字を

書かされたり、床に寝て書かされたり、それから手袋をはめたまゝでペンを握らされたりした。最後には、夜間ドレフヌスの睡眠中急に強い光線を顔にあてて自白を強ひる方法まで行はうとした。これは、典獄のフォルヂネツチイ少佐が反對したので、實現されなかつた。このフォルヂネツチイ少佐は多年犯罪人を見なれてゐた人で、獄中のドレフヌスを觀察して、これは多分無罪の罪らしいと云つて、デュ・パチイ少佐を怒らせた人物だつた。

十月の最後の日になつて、デュ・パチイ少佐は審問の結果を陸相に報告して来た。やはり筆蹟鑑定の結果に力點を置いてゐるのである。

あとは、陸相が裁決するだけのことである。これだけならば、當然に、ドレフヌスに有利になる筈であつたが、それまでまつたく豫期しなかつたやうな新しい勢力が外部から事件に加はることになつて、證據不十分でドレフヌスを放免することが、望んでもさう易々と出来ないことになつた。

部内の幹部級の將校のほかには厳密に極秘にされて来た事件であつたが、例の、國粹的反抗主義の元締である「自由公論」の主筆パビヨ

オに宛てて奇怪な投書をした者が出たのである。

これは、デュ・パチイの報告がメルシエ將軍の手に渡つた十月の最終日に、三日だけ先立つ二十八日のことであつた。

手紙の差出人は殆んど匿名と云つてよいからのもので、簡単にアンリと書いてあるだけであつた。パビヨオは參謀本部附の少佐にこの名前のひとがあるのを知つてゐたが、そのアンリ少佐がドレフヌスを監獄へ送送する任に當つたことまでは知らないであつた。手紙がパビヨオを惹付けたのは、その内容だつた。――軍の機密を獨逸に賣らうとした獨探が軍隊から出ることになつた。詳細はいづれ後からお知らせするが、猶太禍が起らうとしてゐることがこれで知れる。御同様まことに慨嘆に耐へない次第である。

「自由公論」は次の朝の紙面に、特種としてこれを書き立てた。

「軍事上由々しき事件發覺し既に逮捕されたる者がある。確聞するところでは賣國的行為の嫌疑らしいが、政府がこれを未だに嚴秘にしてゐるのは奇怪である。」

これは無論、輿論の爆發を誘ふ導火線になる

やうに仕組まれた記事であつて、また十分にその役をつとめたと言ふことが出来た。諷刺は次の朝の「自由公論」を待ち焦れた。またその日の自由公論社には、反猶太主義の志士の錚々たる人々が、まるで動員されたやうに集つてゐたのである。

既に新聞の間に競争も開始されてゐた。それにつれて袋が破れたやうに秘密が漏れ始めた。「自由公論」だけではなく、總ての新聞が初號活字で書き始めたのである。それからは飛躍的なテンポだつた。経過はその時の見出しの變化で見てもわかるのである。

果然、賣國奴は猶太人か？
有罪の證據歴然。

猶太人遂に自白す。

政府は犯人が猶太人なるを以て事件を採消さうとするか？

反猶太主義の領袖だつたエドワール・ドリユモンは、「自由公論」の社説欄に據つて華々しく内閣攻撃の火蓋を切つてゐた。ドリユモンはこれまでも猶太人を軍籍に置くべからずと主張して来た男で、そのために猶太人の士官と決闘までした経歴のある勇士だつた。事件はドリユモンにとつては虎に翼を與へたやうなも

のだつた。型のやうな煽動でも、こゝでは愛國の志士の悲壯さを帯びて讀む者を感動させるのだつた。

かうして石は轉がり出した。新時代の暴君である輿論がはつきりと形を整へて現れて来た。この輿論を作つた新聞が、やがて逆に輿論に引摺られて行くのである。——土も砂も石も、一度に、一つの方向へ動き出したのである。政府でさえもこの勢ひに逆はうとすれば壊滅せずにはゐられなかつた。——

さて、將軍と云ふものは戦地におゐる時でない、これはまた極端に臆病なものである。

また、盡忠報國が將軍メルシエの關心であつた。冗談にもそれを疑はれたくはないのだつた。メルシエは、佛蘭西共和國を護るために嚴重に善處すると宣言した。また閣議の席では證據として密書だけを提出しながら、ドレフュ

スが絶對的に有罪だと確信する旨を答へて、内閣の運命を氣遣つてゐた閣僚たちに安心を與へた。これが公判の開かれる三週間前のことだつた。

それと同時に、輿論はメルシエ將軍を押し上げて共和國の擁護者として期待した。そのことは「自由公論」が急に論旨をあらためて、政府

の味方となつたのでもわかる。

メルシエにつくか、ドレフュスにつくか。複雑だつた問題は、見事にこゝまで單純化された。と同時に、萬一ドレフュスが放免になるやうなことがあれば、メルシエが陸軍大臣の椅子を棄てることになるのだつた。

行け、ユダ！

ドレフュスは、ずつと冷静だつた。自殺すれば反つて罪を告白したやうに取られると氣がついたのと、やがて自分が放免されるものと信じて、公判を待つてゐた。だから、一番切なかつたことも、妻に會つて事情を話せないことだつた。どんな時よりも、妻子のことが考へられるのだつた。

十二月五日になつて、まだ妻に會ふことは許されなかつたが、初めて手紙をやる事が出来た。

「リユシイよ。

たうとう手紙を書けるやうになつた。公判が十九日ときました。お前に會ふことは、まだ禁じられてゐる。

私がどんなに苦しんでゐるかは書けさう

にもない。この苦痛に相當した言葉などはないのだ。

私が幾度となく俺たちは倅せだとも云つたのを覚えてゐるか？ 實際この世界に何の不足があつたらう。そこへ突然にこの打撃だ。今でも私の頭は碎かれたまゝなのだ。人もあらうに私が、軍人として何よりも怖ろしく思ふこんな罪を犯したらうか？ 今でも夜になると夢にうなされる。

ほんたうのことがやがて判明する。私は冷静だ。良心に何の差づることもない。私は一貫した義務を盡して来た。脇へそれようと考へたことさへない。この牢に來てからは實に耐らなかつた。氣が違つたやうに思つたこともあつた。何を云つてゐるのかさへわからなかつた。しかし、私は、はつきりしてゐる。良心が命令してくれる。『顔を上げろ、眞直ぐに人を見ろ。しつかりして歩け。怖ろしい試験の時には逆ひないが、ぢつと我慢してゐる。』これを今夜の中にとゞけてもらひたいので、もう書き續けるわけに行かない。

どんなにお前を戀しく思つてゐることだらう——子供たちにうんと接吻してやつてくれ。もう書けない。坊やのことを考へたら泣けて來た。

アルフレッド

十二月十九日から裁判が行はれることになつた。ドレフユスの家族が依頼したエドガール・ドゥマンジュ辯護士は、裁判が公開のものになるやうに奔走したし、猶太人で後にこの事件の歴史を書いたほかに歴史家として有名なジョゼフ・レイナツクが、ワルデツク・ルツツオと大統領カジミール・ペリエに請願までしたが、閣議でこれが却下になつた。それほどに、この裁判は、國家的だつたし政治的なものになつてゐた。

軍法會議はシエルシュ・ミデイの監獄内で開かれた。判士は、モオレル大佐以下七人の將校だつた。開廷と同時に列席の政府委員ブリツセ少佐から傍聴禁止を請求した。ドゥマンジュ辯護士が抗辯したが容れられず、法廷には判士、被告ドレフユス、辯護士のほかに參謀本部と内閣に報告する役にあつたピカール少佐と、憲兵隊長とが列席してゐるだけになつた。

裁判は極めて平凡に進んだ。被告ドレフユスは極く平靜な聲で答辯を續けた。態度も軍人らしく、上官たちの環視の中に立つて直立不動の規律正しい姿勢を崩さないで、普通に見たら愛すべき下級士官としか見えないくらゐであつた。

デュ・パチイ少佐が呼び入れられて、ドレフユスに書取りをさせた時の模様を述べた。少佐の陳述はかなりしどろもどろだつた。次に筆蹟鑑定人のベルチヨンが出席して、鑑定の説明をして引退つた。何の動搖もない、豫定どほりと云へばそのとほりの進行である。そのほかに何も起りやうはなかつたのだ。參謀本部情報部のアンリ少佐がやがて出廷した。

アンリ少佐は、見るからに地方出身の將校とわかる風采だし、軍人として型どほりの素朴な純粋な正直一途の人柄で、幅の廣い胸に勳章を光らせて出て來た。判士の質問は參謀本部でのドレフユスの心證に關したものであつたが、その答辯が終つてから少佐は自分で發言したいことがあるといつて許可された。『小官は、あの密書が発見される前に、信頼すべきさる紳士から參謀本部内にスパイのゐることを聞いてゐたのであります。』

アンリ少佐は、顔を真赤にしてかう云つたかと思ふと、くるりと被告席へ向きなほつて手であげてドレフユスの胸を指さした。

『その賣國奴は、此奴でありました。』

指さされたドレフユスよりも、アンリ少佐が激昂に蒼ざめて、聲を頓はせてゐるのだつた。少佐が正直な人で、また參謀本部から賣國奴を出したのを心から憤つてゐたことは、誰れの胸にも通じた。

判士席からこれを撫めて

『あなたにさう云つたのは誰れですか？』

と尋ねた。

『絶対に信用してよい人間です。氏名は、自分の名譽にかけて申上げられませぬ。』

と、この、軍人らしい軍人はきつぱりと答へた。實際にこの男は、殺されてもその人間の名を明かしさうもなく見えたので

『さがつて宜しい。』
と告げられた。

ドレフユスはなほ、罪の嫌疑が露れることを確信して、十二月二十日の法廷へ出た。

この日、ドウマンジュ辯護士が三時間にわたる演説で被告のために熱辯を揮つた。政府委員

のブリツセ少佐が立つて、簡単に判決を希望しただけで席に戻つた。

判士たちが審議に退いた別室には、卓の上に陸軍省から届けて来た参考書が置いてあつた。無論これは辯護士にも見せなかつたものだ。その書類の中にドレフユスが軍籍に入つてからの

經歷書のやうなものがあつた。——その中に、ドレフユスがもとと獨逸にメリニート彈の祕密を賣つたことがあると書いてあつた。

また、それを讀む前に既に、判士たちの肚はきまつてゐたと云へるのである。

判決があつた。

「被告ドレフユスの軍籍位階を褫奪し終身禁錮に處す。」

ドレフユスは打たれたやうに踴りだした。顔色もまつたく生きてゐる人間のやうではなくなつた。

夢中で獨房へ護送されてから後に、ピストルを貸せと叫んで、狂人のやうに暴れるのだつた。

次の日、妻のリユシイから手紙が届いた。

「何と申すなさいけない悲しいことで御座

いませう。みんな、がっかりして口もきけないでをります。あなたさまが男らし

かつたと承つて、この後ともさうお頼み申上げます。お可哀さうな生實におなり遊ばしたので御座います。どうぞ、

このお苦しみにも、お耐へぐださいますやうに。私どもは、命も財産も投げ出して、眞實の犯人を探し出すやうに致します。必ずさう致さねばなりません。あなた様は、もう一度もとのやうにおなり遊ばすので御座います。

私ども夫婦はあしかけ五年の間、何不足なく俸せに暮らしてまゐりました。せめてその思ひ出を力に生き續けて行くやうに致します。その中には正しい者が正しいとせられ、もう一度私どもは俸せになりませう。子供たちもお父さまをお偉い方だと思ふで御座いませう。私たちは坊やをあなた様のやうな立派な男子に育て上げるので御座います。私には、あなた様を除いて、ほかにいゝお手本があらうとは思はれませぬ。

たゞ一度だけでもお目にかゝりたいと存じてをります。それはどうならうとも、これだけはお忘れ下さいませぬ。あなたさまがどんな遠いところへおいでなさい

ませうとも、リュシイはどこまでもお供
いたします。お上でそれをお許しくださ
るかどうかは存じませぬが、私はきつと
お側にまゐります。

繰返して申し上げます。お心を確かにお
持ち下さいますやうに。二人の子供のた
め、私のために、どうぞ、生きてゐてく
ださいますやうに。

リュシイ

もう一通ある。同じ日、二十三日の夕方に
リュシイが書いて寄越したものである。

「耐へがたい悲しみの中にも、ドゥマン
ジュさまからあなた様のことを承つて
嬉しう存じました。それから心を取直し
てをります。

旦那さま、私があなた様をどれほどお慕
ひ申上げお敬ひ申上げてゐるかは御
承知で御座います。私どもが今受け
てゐる大きな不幸も怖ろしい侮辱も、た
だ、これまでも増してお慕はしく思は
せるばかりで御座います。

旦那さまがどちらへおいでなさいませう
とも、リュシイはお供いたします。二人
でゐれば、どこへ流されませうともずつ

と平氣でゐられるやうに存じます。あな
た様は私のために、私はあなた様のた
めに、暮らすやうに致すので御座います。
子供たちを育てて、このさだめない世の
中に雄々しく暮らすことも出来ませう
に、強い人間にするので御座います。

私はあなたさまなしでは生きてゐられま
せん。これから死ぬまでお傍にさへゐら
れれば、それだけで倅で御座います。
あなたさまは罪もなくお苦しみになつて
おいでで御座いますが、まだく怖ろし
い苦しみにおあひなさることで御座いま
す。何と云ふいとはしいお仕置でせう。
どうぞ、男らしく御堪忍くださいませや
うに。

無賃のことで御座いますからお強くして
ゐられます。この侮辱されるのが御自分
でなく他の人間だと思召して、リュシイ
のためだ、お慕ひ申上げてゐる妻のため
だと思召して、不當なこともお忍びくだ
さいませうやうに。どれほどリュシイを愛
してゐてくださるか、見せてやるのだと
思召して、子供たちのこともお考へ遊
ばして。

この子たちがやがてお父さまにお禮申
上げるやうになりませう。この子たちは
お父さまのことばかり尋ねてをります。
宜しくと申してをります。

リュシイ

辯護士の上告は、十二月三十一日付で却下
になつた。

デュ・パチイ少佐がドレフヌスの獨房を訪れ
たのは、その日のことだつた。

少佐は

『君が今からでも自白するやうだつたら、減刑
を願へると思ふ。』

と云ひ出した。

『獨逸側から何か喚ぎ出す手段として、交換的
にこちらの軍機を漏らすやうなこともないでは
ないからな。』

ドレフヌスは、少佐の顔を見詰めてゐて答へ
た。

『自白するやうなことは、何もないのでありま
す。』

それから、少佐がなほ無言で立つてゐて出で
行かうとしないのを見て

『たゞ申上げたのは、私はどちらへ送られ

ませうとも、なほ嚴重に眞犯人を御搜索願ひたいと云ふことです。』
と云つた。

『君は、さう思ふか？』

デュ・パチイ少佐は、かう云つてドレフユスの沈痛な顔を見詰めた。

『はい。』

と、ドレフユスは答へた。

少佐はまた無言に戻つて、佇んでゐたが

『君がほんたうに覺えないことだつたら……君ぐらゐ不幸な人はないだらう。』
と、不安らしくいつて、出て行つた。

越えて翌年の一月五日に、ドレフユスの黜罰が行はれた。前の手紙でリュシイが「まだまだ怖ろしいこと」と書いたことなのである。
新聞記者アドルフ・ブリツソンがその時のことを見て書いた記事がある。

河岸へ出るとひどい風だつた。馬車が幾臺も練兵場の方へ走つて行く。往來には巡查が大勢出てゐたし、兵隊が各所に集つてゐた。

八時四十五分に、軍隊が来て法廷の外に並んだ。ドレフユスは間もなく出て来て、この間を通るのだ。凡そ半哩、數千人の視線をあびて通

るのだ。

九時になつて、兵學校の時計が鳴り出すと同時に、ダラス將軍がサーベルを揚げた。喇叭が鳴り出した。

森とした中に、五六人で裁判所の角から出て來た者があつた。これがドレフユスと、護送の兵士だつた。

ドレフユスは、顔をあげてゐる。嚴肅な顔色だつたが、態度は平然としてゐる。練兵場へ行く普通の軍人を見るのと別段變つたところは認められなかつた。この一團は將軍の前二十歩のところ立ち止つた。

將軍が口を動かした。これが宣告だつた。
ドレフユスは兩手をあげて何か叫んだ。憲兵たちが急に襲ひかゝつて、ドレフユスの服の飾紐と釦をちぎり取つた。軍帽の徽章も聯隊名も剝ぎ取られた。最後に憲兵の一人がドレフユスの帶劔を抜き取つて、これを膝にあてて、へし折つた。

折れた劔は、ドレフユスの足もとに土の上へ投げ出された。ドレフユスの軍服を飾つてゐた金色の紐は無論、ズボンの赤條まで剝がれてゐたのだ。護衛の者はこの變つた姿のドレフユスを歩かせ始めた。幾千の人間の間を通つて來る

のである。

群集はまつたく、それまでの靜肅さを失つて動搖してゐた。兩側から袂まれさうに狭くなつたところをドレフユスが歩いて來ると、到る所で嘲罵の聲が起つた。

『猶太人！』

『賣國奴！』

『殺せ、獨探！』

暴風の海のやうだつた。ドレフユスは死人のやうに蒼ざめてゐたが、軍人らしい癖のある規則的な足どりで歩いてゐた。

將校たちの中から

『行け、ユダ！』

と叫んだ者があつた時、急に立ち止つて、唇をふるはせたと思ふと

『俺は潔白だ。俺は潔白だ。』
と叫んだ。

その聲は、もとより、これまでより烈しく起つた嘲罵の聲で消されてゐた。

なほ、ドレフユスは聲をからして叫んでゐるのだつた。叫びながら、そのために一層罵られるが、なほ叫び續けてゐるのだつた。暴行が行はれるのを懼れて兵士を前列に並べてあつたのだが、憲兵や巡查は、群集の熱狂を抑へる

のに大童になつてゐた。

ブリッソンは、ドレフユスの顔には憤怒だけがあらはれてゐるやうな気がした、と書いてゐる。

「その怒りも最早自制の程度を超えたものだ。目は血走つてゐたし、口は開けたまゝだつた。」

ドレフユスは手銃をはめられて、サンテ監獄に投ぜられた。

この夕方も、リュシイは獄中の夫に手紙を書いた。

「何と云ふ怖ろしい朝でしたらう。何と云ふ残酷な時間でしたらう。いゝえ、もう思ひ出したく御座いません。考へるだけでも胸が裂けさうで御座います。あなたさまが、あなたのをやうに正しい方が、あんなにも佛蘭西を愛していらつしやる方が、こんなにも無禮な目におあひなさらうとは。

男らしくしてゐると仰有つて下さいました。そのとほりで御座いました。勿體ないと思存じます。御立派なお様子がどうして人様を動かさずにゐましたらう。もう一度好い時がまゐりましたら、

この怖ろしい時にあなた様の御我慢になつた苦しみを思つて、皆さんが必ず後悔なさることです。

どんなにお側へ伺つてお力になりたいことでせう。お目にかゝりたくてたまりません。まだお許しがないので悲しがつてゐます。もつと待つてゐなければいけないのでせうか。

子供たちはおとなしくしてくれてゐます。元氣ですし、ほんたうに香氣です。私どもの不幸の中にも、これたちがまだ幼くて何も氣がつかずにゐるのが、せめてもの慰めになります。ピエールがお父さまのことを申してをります。ほんたうに優しくて、私が泣かずにゐられませぬ。

リュシイ

悪魔島

サンテ監獄へ移つてから、初めてリュシイに面會が許された。しかしこれは極めて短時間のものだったし、夫婦はお互ひに話したいことを澤山持つてゐながら、物を云へば涙がこぼれる

ので、碌な話も出来ないのだつた。

リュシイは實際に健氣な女だつた。短い言葉で、不幸な夫の氣を引立て力付けて、いつまでも生きてゐるやうに覺悟を持たせた。生きてさへゐれば、やがて自分たちの失つた幸福が戻つて来るのではないか？ これだけだつた。まつたく、これだけの望であつた。

ドレフユスもまた、さう思ふのだつた。骨格の髓まで軍人的に單純で正直だつた彼は、どうか考へても自分が受けた誤解が今のまゝでゐようとは信じられなく出来てゐた。佛蘭西の軍隊は神聖なものである。國の光榮である將軍たちは正しいし信頼してよいのだ。間違ひがいつまでこのまゝでゐようか？ ドレフユスはこの信仰だけをまだ失くしてゐない。やがて、再び自分があんなに誇りにしてゐた佛蘭西陸軍の軍服を着けて、規律正しい歩調で巴里の町を歩くことも出来るのである。ドレフユスはかう信じてゐる。いや信じようとしてゐる。リュシイは涙の中で頷いて見せて、時間もきれたので追ひ出されるやうに外へ連れ出された。

外は寒い一月の憂鬱な空だつた。辻々には、猶大人排斥運動のピラが昨日のまゝ残つてゐたらう。人はまだどこでも、それが公衆の前で受